

ハルシナイから上流へ⑬

明治十七年、内務省地理局の高橋不二雄は、北海道の中央高地の測量のため、札幌県地理課主任の福士成豊と石狩川水源の石狩岳に登頂するなどして、本道の中央高地の詳細を明確にした。このことは、本連載でもしばしば紹介した。

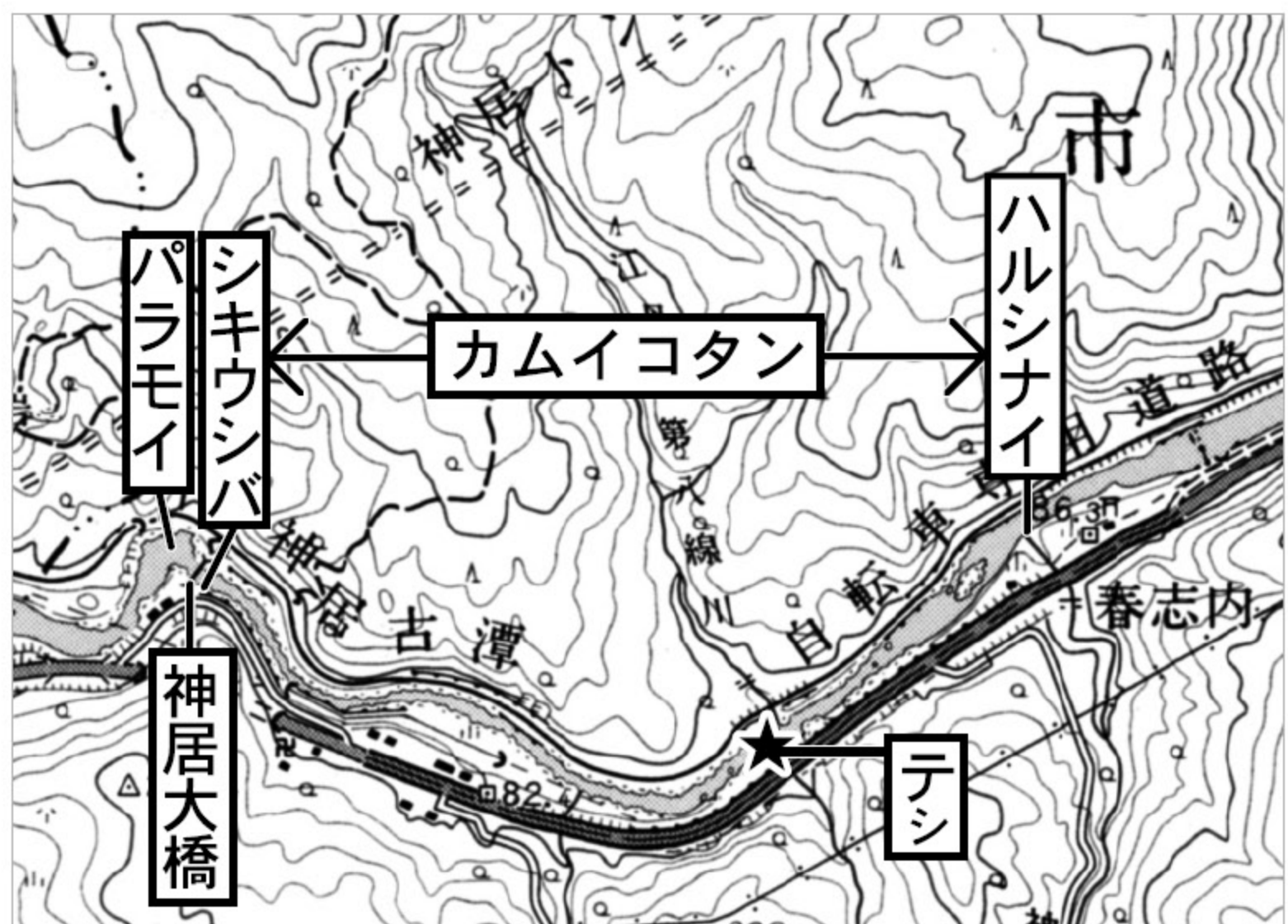
本連載の⑤では、「神居古潭」の漢字表記は、高橋不二雄が編纂した、明治二十年内務省地理局発行の『改正北海道全図』で、確定したことを紹介した。また、高橋不二雄がこの踏査で描いたスケッチ集の『溯碕画帖』の中から、**掲載地図**のパラモイ(Para-moy 広い・湾)を描いた絵も、紹介したところである。

高橋不二雄は、明治十七年の踏査の記録を『札幌県巡回日誌』として残した。この日誌からカムイコタンに関する部分を中心に紹介する。

断章 旭川のアイヌ語地名研究

88

高橋 基



高橋・福士一行六人は、八月二十日に丸木舟二艘で江別を出発し、カムイコタンには、八月三十日に到着し、パラモイで露宿した。

翌三十一日には、大きい方の丸木舟を空舟にして三十町上流のハルシナイまで引き上げさせた。一方、小さい丸木舟の方は、陸に引き揚げて保存した。九月一日には、前日、上川からの迎えの丸木舟二艘でハルシナイに到着して、アイヌの人たち五人が、ハルシナイから到着。翌二日にハルシナイへ荷物を陸送し、ハルシナイで野営。九月三日、八時五分に丸木舟三艘でハルシナイを出発、午後二時五十分忠別川と

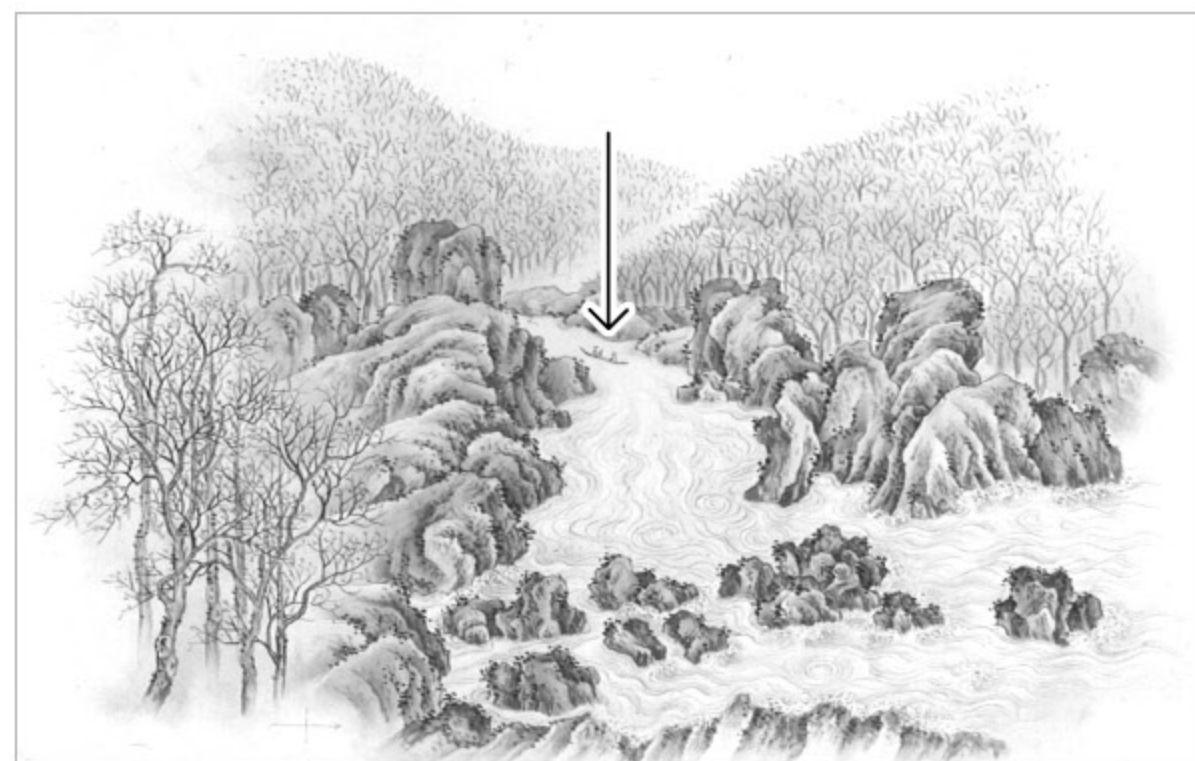
の合流点に到着、石狩川の左傍で露宿した。

九月四日から石狩川水源踏査に丸木舟二艘に乗って出発。高橋・福士一行は、九月二十四日に石狩川水源に到達、石狩川水源の山を初めて石狩岳と命名した。帰途、現・ニセイカウシュツペ山、現・旭岳に風雪を冒して登頂し、経緯度・高度を測定し、初めて、『改正北海道全図』に記載した。

帰路の十月三十日には、ウエンマクンベツ(旭川市永山町十六丁目)から丸木舟二艘で石狩川を一気に下り、ハルシナイに野営する。ハルシナイからシキウシバの間のカムイコタンは、激流のため丸木舟の往来は不可能と言われていたが、翌三十一日に、同行の四人のアイヌの人たちが、丸木舟で下ったのである。これまで紹介したカムイコタンの踏査記録にも、伝承にもない快事が、実行・記録されたのである。

すなわち、同行のイカスケ、イソノスケ、アチヤコエヌ、トツキシの四人が、雑荷のみを丸木舟に積み、ハルシナイからシキウシバの間のカムイコタンと言われた激流を下ったのである。ただし、ハルシナイから一町余下流の「大滝」と言われる大難所だけは、空舟にして丸木舟を下げた。

他方、高橋不二雄と福士成豊は、緊要



「アイヌ軽舟ヲ棹シ激流ヲ下ルヲ見ル図」(↓印・丸木舟)高橋不二雄『溯碕画帖』

の物品は、同行の市兵衛、国三郎、イゾデニカに背負わせ、二人は野帳等を持参して歩行した。高橋不二雄は、

掲載地図の★印のテシ(Teshi 岩梁)の所で、丸木舟が激流を下ってくる様子を見て、次のように記述している。

「中途ノ一の難場ニテ小休シ、折節川上ヲ顧ミレバ、遙カニ乗船ノ下ルアリ。瞬間ニシテ余等方前ニ来ルヤ否ヤ、大激流ヲ衝突スル如クニ進行スレバ、恰モ該舟ハ木葉ノ激浪ニ浮ブニ似テ、今将ニ転覆セントスル形状アリ、傍觀モ亦肝冷ヘタリ。其ノ迅速矢ノ如シ、直チニ見取ヲナス(註―スケッチを描く)。」
そのスケッチが、**掲載絵図**(『溯碕画帖』の原画は彩色)である。カムイコタンの唯一無二の貴重な記録である。
その後、パラモイの山腹に保存した丸木舟を下るして昼食をとり、丸木舟二艘で石狩川を下る。その後も調査を重ねて、十一月十五日に札幌に帰着した。
(アイヌ語地名研究会幹事)

※毎月第1週号に掲載します